

## 外国語学部における中途退学者と面談基準 Dropouts and Interview Criteria in the Faculty of Foreign Studies

仲田 知弘<sup>†</sup>  
Tomohiro Nakada

浜 正樹<sup>†</sup>  
Masaki Hama

### 1. はじめに

日本の大学は、大学進学率が上昇し続ける中で、学ぶ方法や生活習慣、中途退学等の学生への支援を必要としている状況である[1]。中途退学者の増加は、大学経営にも影響するため、本学を始め重要な課題の一つである。また、先行研究では、様々なデータを用いて、中途退学者の予測[2]や成績不振者の早期発見[3]、履修科目を用いたデータ分析[4]や中途退学者と卒業生の分類[5]等が行われている。

また、本学の外国語学部では、1年生から4年生までの全学生の個別面談の機会(年2回)を設けている。さらに、成績不振者や欠席が多い学生においては、面談の機会を増やし、学生に寄り添った対応を行っている。そのため、教員は、授業や研究の他に、学生との面談調整や個別面談、その報告書等を作成に追われている。

そこで、本論文では、学生の個別面談における教員負担の軽減を検討するため、中途退学者と卒業生の分類[5]と本学の外国語学部で設定されている成績不振者等の面談基準を比較する。

### 2. 外国語学部における面談基準

本学の外国語学部では、クラスアドバイザーやゼミナールや卒業研究等で配属された一人の学生につき、年2回の個別面談と成績不振や欠席の多い学生等の面談(年に最低1回~最大4回)が業務内容の一つになっている。なお、本学の外国語学部は、卒業要件が128単位であり、年間に履修登録できる単位を50単位未満となっている。

成績不振や欠席の多い学生等の面談の基準は、表1と下記の面談基準となっており、それぞれの基準以下になると面談を実施するため、年に最低1回~最大4回の個人面談となる。

- 成績不振による面談：GPAが1.0以下の学生
- 多欠面談：各学年の必修科目”○○○○”の最初の3回の授業を連続して欠席した学生

本学のGPA(Grade Point Average)は、各教科の成績(A(90点以上)：4、A(80点以上)：3、B(70点以上)：2、C(60点以上)：1、F(不合格)：0)を定めており、学生の総合的な成績を数値化している。すなわち、GPAが1.0以下の学生は、ほとんどの成績がF(不合格)であり、合格点であるAAからCの評価が少ないことを意味する。多欠面談は、各学年の必修科目を1科目設定し、その授業の前半で連続欠席している学生を抽出している。そのため、授業の中盤や後半で欠席している学生は個人面談の対象外となる。単位不足の基準は、4年間で大学卒業や3年生のゼミナール配属基準等を考慮した基準であり、表1のとおり、半年おきに定められている。本学の外国語学部では、様々な視点から個人面談の基準が定められており、該当する学生と個人面談の調整を行っている。

表1 単位不足の基準

時期	学年	単位不足の基準
4月時点	1年生	-
	2年生	修得単位数：25以下
	3年生	修得単位数：50以下
	4年生	修得単位数：90以下
9月時点	1年生	修得単位数：12以下
	2年生	修得単位数：35以下
	3年生	修得単位数：60以下
	4年生	修得単位数：100以下

### 3. 分析方法と結果

#### 3.1 外国語学部における中途退学者モデル

先行研究[4]では、外国語学部に在籍する学生のデータから中途退学者と卒業生を分析するため、2015年から2018年までに入学した過去の成績データを用いて、ロジスティック回帰による中途退学者モデルを作成した。なお、分析データは、2015年から2018年の入学者の4年分の学生データの中から在学中の学生やNull値(何もデータがない)を除く、卒業生835名、中途退学者247名、総数1082を用いた。これらのデータは、ランダムで学習データセットを7割、検証データセット3割の2分割にした。

ロジスティック回帰によって求められた変数の重みは、下記の通りとなった。

AA：0.74、A：1.23、B：1.39、C：0.74、F：-0.28、F\*：-0.31、F\*：-0.67、N：0.29、P：0.04

それぞれの評価基準の見方は、AA：90-100点、A：80-89点、B：70-79点、C：60-69点、F：59点以下、F\*：試験欠席、F\*：失格(出席回数が満たさない)、N：編入等の認定単位、P：認定単位である。また、先行研究では“卒業の可能性”と“中途退学の可能性”の分類を評価するため、混同行列の正解率で約97%を示したと記載している。

#### 3.2 中途多学者モデルと面談基準

本節では、外国語学部における面談基準と先行論文のロジスティック回帰モデルを様々なケースで比較する。そこで、ケース1として、個人面談の基準となっている単位基準をモデルに代入、ケース2として、成績のC評価を変化、ケース3として、成績の欠席評価(F\*)の変化を中途退学の確率で評価する。

### 3.2.1 単位基準による中途退学の可能性

本節では、先行研究のロジスティック回帰モデルに表 1 の単位数を入力し、中途退学の可能性を検討した。例えば、1 年生 9 月の 12 単位以下の場合、面談対象者になる。しかし、ロジスティック回帰モデルでは、C 評価で 12 単位とした所、中途退学の可能性が 0% となった。同様に、他の学年や他の時期でも、C 評価で表 1 の基準を入力すると、中途退学の可能性が 0% となった。

### 3.2.2 C 評価の変化と中途退学の可能性

本節では、C 評価を 0 から 12 までを入力し、中途退学の可能性を表 2 に示した。その結果は、C 評価で 8 から 12 までを入力すると、中途退学の可能性は 0% である。その後、C 評価を 7 から 0 までを入力することで、中途退学の可能性が 1% から 50% まで上昇した。

表 2 C 評価の変化と中途退学の可能性

	AA	A	B	C	F	F-	F*	N	P	退学の可能性
重み	0.74	1.23	1.39	0.74	-0.28	-0.31	-0.67	0.29	0.04	
実験01	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50%
実験02	0	0	0	1	0	0	0	0	0	32%
実験03	0	0	0	2	0	0	0	0	0	19%
実験04	0	0	0	3	0	0	0	0	0	10%
実験05	0	0	0	4	0	0	0	0	0	5%
実験06	0	0	0	5	0	0	0	0	0	2%
実験07	0	0	0	6	0	0	0	0	0	1%
実験08	0	0	0	7	0	0	0	0	0	1%
実験09	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0%
実験10	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0%
実験11	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0%
実験12	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0%
実験13	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0%

### 3.2.3 失格評価の変化と中途退学の可能性

本節では、失格評価を 1 から 12 までを入力し、中途退学の可能性を表 3 に示した。その結果は、失格評価で 1 から 5 までを入力すると、中途退学の可能性は 0% である。その後、失格評価を 6 から 12 までを入力することで、中途退学の可能性が 1% から 30% まで上昇した。

表 3 失格評価の変化と中途退学の可能性

	AA	A	B	C	F	F-	F*	N	P	退学の可能性	GPA
重み	0.74	1.23	1.39	0.74	-0.28	-0.31	-0.67	0.29	0.04		
実験14	0	0	0	12	0	0	1	0	0	0%	0.9
実験15	0	0	0	12	0	0	2	0	0	0%	0.9
実験16	0	0	0	12	0	0	3	0	0	0%	0.8
実験17	0	0	0	12	0	0	4	0	0	0%	0.8
実験18	0	0	0	12	0	0	5	0	0	0%	0.7
実験19	0	0	0	12	0	0	6	0	0	1%	0.7
実験20	0	0	0	12	0	0	7	0	0	1%	0.6
実験21	0	0	0	12	0	0	8	0	0	3%	0.6
実験22	0	0	0	12	0	0	9	0	0	5%	0.6
実験23	0	0	0	12	0	0	10	0	0	10%	0.5
実験24	0	0	0	12	0	0	11	0	0	18%	0.5
実験25	0	0	0	12	0	0	12	0	0	30%	0.5

## 4. 考察

本論文では、3つのケースを元に、外国語学部における個人面談の基準とロジスティック回帰モデルによる中途退学の可能性を確率で比較した。

ケース 1 では、各学年の判定時期による単位で、中途退学する可能性が 0% となった。ケース 2 では、C 評価のみを変化させると 7 単位以下で中途退学する可能性が上昇した。この 2 つのことから、現在の個人面談の基準が中途退学にならない人も含まれていると考えられる。また、個人面談の基準は、中途退学者の予備群も含んでいるとも考えることができる。

ケース 3 では、C 評価を 12 単位に固定し、失格評価 (F\*) を変化させた所、失格評価 (F\*) が 6 単位以上で中途退学する可能性が上昇した。また、GPA は、0.7 以下で中途退学する可能性を示している。この結果からは、単に取得単位数だけで中途退学者の可能性が出るのではなく、失格評価 (F\*) の割合が重要であると考えられる。ロジスティック回帰モデルの重みでも、そのような数値が示されており、欠席評価を取らないことも重要である。さらに、個人面談の評価基準では、“GPA が 1.0 以下の学生”を定義しており、ケース 3 の失格評価 (F\*) が増えると、GPA の数値が減少する傾向と一致する部分がある。ただし、このケースも、ケース 1 やケース 2 と同様に、個人面談の基準が中途退学者の予備群を含んでいると考えられる。

## 5. おわりに

本論文では、学生の個別面談における教員負担の軽減を検討するため、中途退学者と卒業生の分類のロジスティック回帰モデル[5]と本学の外国語学部で設定されている成績不振者等の面談基準を比較した。

その結果、外国語学部で設定している個人面談の基準は、中途退学者と卒業生の分類のロジスティック回帰モデルの中途退学の確率で 0% を含んでおり、中途退学の予備群を含んでいると考えられる。よって、今後の個人面談の運用を考える場合は、教員の負担と個人面談の対象者数のバランス、中途退学の確率の違い等を考慮することで、効率的な学生支援を検討することが重要である。なぜなら、学生は多様化が進み、学生支援を求める人が増えているからである。さらに、教員や職員の業務内容も増えており、従来の方法を継続することが困難な状況である。

今後の課題は、中途退学者と卒業生の分類のロジスティック回帰モデルの特徴を分析し、効率的な学習支援の一つとして、運用方法の確立が必要である。

### 参考文献

- [1] 日本学生支援機構, “大学等における学生支援の取組状況に関する調査(令和 3 年度(2021 年度))結果報告” (2022)
- [2] 白鳥成彦, 大石哲也, 田尻慎太郎, 森雅生, 室田真男, “中退確率の遷移を用いた中退学生の類型化”, 日本教育工学会論文誌, Vol.44, No.1, pp.11-22 (2008).
- [3] 大河内佳浩, 山中明生, “プレースメントテストや高校の履修状況などのデータを用いた初年時成績不振者の早期発見”, 日本教育工学会論文誌, Vol.40, No.1, pp.45-55 (2016)
- [4] 仲田知弘, 浜正樹, “外国語学部における科目履修システムに基づく分析”, 電子情報通信学会 2023 年総合大会, p.113, (2023)
- [5] 仲田知弘, 浜正樹, “外国語学部における中途退学者と卒業生の分類”, 令和 6 年電気学会全国大会, p.18 (2024)